Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.9*, pp. 151-160, 2016
信州大学教育学部研究論集　第9号　pp. 151-160　2016年

＜研究報告＞

「目標」を表す前置詞 at，for に関する一考察*

—なぜ look at は「見る」，look for は「探す」なのか—

中嶋　渉　　信州大学大学院教育学研究科

キーワード：前置詞の at/for，目標，見えない動詞

１. はじめに

同じ動詞でも前置詞との組み合わせによって生じる意味が全く違ったものになることがある。次の対比を見てみよう。

(1) a.　He looked at his watch.
　　b.　He looked for his watch.

(1a)が「見た」，「見つめた」という意味であるのに対し，(1b)は「探した」という意味である。前置詞以外は全て同じ語であるが，生じる意味は at を用いるか for を用いるかで大きく異なっている。(1)で示した at および for の意味は，どちらも辞書や文法書で「方向」，「目標」，「対象」といったキーワードで分類されていることが多い。（本論では便宜的に(1)の意味を「目標」と呼ぶこととする）。なぜこのような意味の違いが生じるのだろうか。

本論では，英語の前置詞 at と for それら自体の意味を，先行研究をもとに考察し，「目標」を表す at と for の特徴に焦点を絞って比較，分析を行う。

２. 前置詞 at，for の中心的意味

前置詞の多義性について研究する際，単語の中心的な意味（コア，原義とも呼ばれる）から多様な意味の拡張が起きているとする認知言語学的な手法がとられることが多い。この章では先行研究をから「目標」を表す at，for がどのような特徴をもつかを見ていく。

2.1　at

高木（2004）は，前置詞 at の中心的な意味を「ところ」と定義し，そのプロトタイプ（意味の拡張において最も基本的な例）を「点」としている。高木によれば，前置詞 at は *Oxford English Dictionary* において場所を表すもの（SPACE），時間を表すもの（TEMPORAL），抽象的な関係を表すもの（ABSTRACT）の三つに分類され，それぞれの初出の文例から，こ

* 本論の執筆にあたって，信州大学教育学部英語教育専修の田中江扶准教授から貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げたい。また，本論を完成させるまでに議論を重ねてくれた英語教育専修の大学院生の龍野祐輝，滝澤士朗の両氏にも心からの感謝を捧げたい。

の中で SPACE が at の本来的な意味であり, 歴史的な変遷の中で TEMPOTRAL, ABSTRACT へと意味が拡張していったと考えられる。

(2)SPACE を表す意味

at the point

I live in at 89 Jackson Street.

TEMPORAL を表す意味

（時刻）at 8 A.M.

（1 日のうちのある部分）at {dawn / daybreak/ dust / night}

（ある時間）at {the moment / the same time / once}

ABSTRACT を表す意味

（目標）look at / aim at / point at / smile at

（割合・程度）at {200 degrees / a lower price}

（従事）at {war / work / the party / dance / show / funeral}

そして at の意味が拡張していく際，もともと場所を表していた中心的意味の「ところ」を特定の一点と解釈することで，時刻や目標といった意味が出てきたと分析している。

安藤（2012）も同様に，at の中心的意味を「場所・時間の＜一点＞（point)」とし，「目標」を表す at を＜一点＞がある動作の目標になっていることを表すと説明している。

(3) a. She pointed at the placard with her finger.

b. I hate him because he always laughs at me.

c. I stole a glance at the girl.

(3)で示した例では，the placard，me，the girl がそれぞれの動作の目標になっている。

さらに，宗宮他（2007）は空間前置詞を「人が道を歩く」という喩えを用いた説明の中で，at について「帯状の全行程を視野におさめた上で，他をやり過ごし，今はここだ，と現在地を指す」と述べている。そして，他の場所を排し現在地を指すという点から，「至近距離」の意味が生じるとしている。

(4) a. The children threw stones at me.（子供らが私に石を投げつけた）

b. He threw the blanket to me.（彼が私に毛布を投げてよこした）

宗宮らによれば at は to よりも相手への距離が短く感じられ，at を用いた(4a)では，「子供らが投げた石が私に当たった」という意味合いが強く出る。この距離の短さは，行為の目標がより明確であることの表れであることから，(4a)は「目標」の at であると考えられる。

また宗宮らは，at を伴う表現の意図性についても言及している。宗宮らのいう「距離」とは心理的な距離のことであり，距離の近さは動作を行う人の感情を反映している。(4a)の at はその心理的距離の近さから，「石を投げる」という動作に「子供たち」の感情（主に嫌悪感などの否定的な感情）が伴っていることが読み取れるが，(4b)の to の場合はこのような感情を伴わない。

「目標」の at に意図性があるという記述は，英和辞典にも見ることができる。『ジーニアス英和辞典机上版』（1988，大修館）には，「目標」を表す at の解説として「一点に向けての意図的な行為・試みを示す」とあり，to と比較した次の例文が挙げられている。

(5) a. throw the ball at Bill　（当てようと思ってビルにボールを投げる）
　　b. throw the ball to Bill　（捕球できるように投げる）

訳からも分かるように，at を用いる(5a)では動作主がある一点（＝ビル）を狙うという意図性の強さが読み取れる。つまり，「ボールを投げる」という動作に対し，(5a)の at は(5b)の to よりも意図性が強いことがわかる。さらにこの意図性の強さによって，at を用いた表現では非難や攻撃の意味合いが出るとされている。次の対比を見てみよう。

(6)　a. She shouted at me.　（怒鳴りつけた）
　　b. She shouted to me.　（大声で言った）

(6a)の at の場合，彼女が大声を発することによって叱責したという意味を表す。(6b)の to の場合は大声を発せられる対象が私であることが示されているだけで，非難や攻撃の意味は出ない。このことから，at は to よりも意図性が強いため，非難や攻撃といった意味も表すということが分かる。

以上のことをまとめると，「目標」を表す at の特徴は以下の二点である。

「目標」の at の特徴

i.「ある一点」を示す（示す範囲が狭い，絞り込まれている）

ii. 意図性が強い

2.2　for

「目標」を表す for は，「方向」や「到達点」を表す to と比較されることが多い。刀祢（2012）は次の例文を用いて for と to を比較している。

(7)　a. Lucy left for London.
　　b. Lucy went to London.

(7a)と(7b)を比べると, どちらも London への移動を表してはいるが, (7a)の for の場合は Lucy が London に向かったことしか示さず，到着しているとは限らない。一方で，(7b)の to の場合は Lucy が London に到着したということまで含意している。

これと同様に花﨑・花﨑（2012）は，到達を含意しないという for の特徴について以下の例を挙げて考察している[1]。

(8) a. John gave some money to Mary.
b. John bought a doll for Mary.

(8a）の to の場合は some money が Mary に渡されたことが明確に分かる。しかし(8b)の for の場合，a doll が Mary の手に必ずしも渡ったとは限らない。このように，for の場合は到達が含意されない。

宗宮（2007）は Lindstromberg（1998）や Dixon（2005）などの研究をもとに，for が「現実の事象に関する話者の想定」を示すものであると捉えている[2]。

(9) This piece of cake is for Jane.

(9)は Lindstromberg が典型的であるとした for を用いた表現である。この例の場合，ケーキは現実に存在するものであり，for の後のジェーンは話者の想定である。つまり，ジェーンがそのケーキをもらうことが想像できるということを表している。この現実と想定の構造は,「目標」を表す for にも当てはめることができる。

(10) They left for home an hour ago.

---

[1] **双方向を表す for**　花崎・花崎（2012）は「for の中心義は＜双方向性＞である」として，for を to と比較しながら解説している。

(i) a. sing for each other
b.sing to each other

(i)の例において，for を用いた場合は喜ばそうとしている意図が感じられるが，to を用いた場合は相手が聞いていようといまいと歌っている状態を表している。つまり for の場合は，聞く相手がいることにいわば呼応する形で sing という動作が行われている。これが花崎らの指摘する双方向性である。

[2] **for の意味的特徴**　宗宮（2007）は，先行研究から for の意味的な特徴として次の 6 つを挙げている。

①非現実感を伴う

②漠然としている

③起点中心で空間移動を含意しない

④of よりは距離感がある

⑤想像上のことや目的・決意・希望などを表すのに向いている

⑥「～が・・・する」を表し，for に後続する名詞は行為者が適している

これに Fillmore（1982）に由来する「フレーム」という概念を応用し，分析を行っている。詳しくは宗宮（2007）を参照。

宗宮によると，(10)では for は帰路に向かう心（=想定）を表している。よって，(10)はある場所を発ったという現実の事象が述べられ，その行為の向かう先として家が想定されていることが示されている。しかし，実際に到着するかどうかは曖昧である。

以上のことをまとめると，「目標」の for の特徴は次の二点になる。

「目標」の for の特徴

i. 行為の方向を表し，到着は含意しない

ii. 対象を想定する

３．分析

前章では，前置詞 at，for の意味に関する研究を参照し，本論のテーマである「目標」を表す at，for の特徴をまとめた。この章ではそれらを踏まえ，at および for が動詞と共に使われた際の意味を考察していく。

3.1　前置詞の有無による変化

まずは次の例文を見てみよう。

(11) a. He kicked the ball. (*but failed.)

b. He kicked at the ball. (but failed.)

(12) a. The police searched the body. (?but didn’t find it out.)

b. The police searched for the body. (but didn’t find it out.)

上の例では，前置詞 at，for の有無によって文の意味に違いがある。(11a）の kicked the ball は「ボールを蹴った」という意味だが，(11b)の kicked at the ball は「ボールをめがけて蹴る動作をする」という意味である。よって(11b)には but failed を付け足すことが出来るが，(11a)ではすでにボールを蹴るという行為が完遂されているため，but failed を付け足すことは出来ない（防越（1998）参照）。(12a)の search the body と(12b)の search for the body はそれぞれ「遺体を調べる」，「遺体を捜索する」という意味になる。そのため but didn’t find it out を続けると，(12a)は it を the body 以外のものとして解釈しなければならなくなる。

なぜこのような差が生じるのだろうか。(11)と(12)の a と b は，前置詞があるかないかの違いであるため，前置詞が動詞と直接目的語の間に介在することで異なる意味を生じさせている，と考えるのが自然であろう。(11b)を例にとると，他動詞 kick とその直接目的語 the ball の間に前置詞 at が介在し，そこに at 自体がもつ意味を加えることによって，「ボールをめがけて蹴る動作をする」という意味になる，と考えられる。

では at，for によってどのような意味が加えられるのだろうか。ここで，前章でまとめた「目標」を表す at と for の特徴を改めて見てみる。

＜at＞　i.「ある一点」を示す（示す範囲が狭い，絞り込まれている）
　　ii. 意図性が強い
＜for＞ i. 行為の方向を表し，到着は含意しない
　　ii. 対象を想定する

これらの特徴から，「目標」の at は「一点」と「意図」，for は「方向」と「想定」という意味を先行する動詞に付け加えると考えるのが自然であろう。よって，(11)，(12)の意味を図式化してみると，それぞれ(13)，(14)のようになる。

(13) a.「蹴る」→「ボール」＝「ボールを蹴る」
　b.「蹴る」＋「**一点 ＋ 意図性(at)**」→「ボール」＝「ボールをめがけて蹴る動作をする」
(14) a.「調べる」→「死体」＝「死体を調べる」
　b.「調べる」＋「**方向 ＋ 想定(for)**」→「死体」＝「死体を捜索する」

(13a)のように「蹴る」という行為が直接その対象の「ボール」に結び付けば，当然それは「ボールを蹴る」という意味になり，その行為が完遂されていると解釈される。しかし(13b)のように at が介在すると，この「蹴る」に at が持つ「一点」と「意図」という意味が加えられることで，「ボールをめがけて蹴りかかる」というような意味になり，その意図性が強くなる。他にも，slash at（切りつける）や grasp at（掴もうとする）などといった表現でも同様のことが言える。また，(14a)は「調べる」という行為が直接「死体」に結び付くことで，「死体を調べる」という意味になる。ここで(14b)のように「調べる」に for の特徴である「方向」と「想定」の要素が加わると，一見定まった方向に進んでいるように思われるが，for の特徴として，着点を含意せず方向だけを指示するということに留意したい。そうすると，「死体が在ると想定される方へ向かって調べる」，つまりは「死体を捜索する」という意味にとることができる。

以上のことから，「目標」を表す at と for について以下の仮説が立てられる。

(15)「目標」を表す at は AIM，for は HEAD という文中に表れない概念的な意味をもつ。

次節ではこの仮説を更に詳しく検証していく。

3.2 見えない動詞の存在

3.1 節の(15)で述べたように，at の「一点」と「意図性」，for の「方向」と「想定」という意味を担う概念を，それぞれ AIM，HEAD と表した。これらはあくまで記号であり，それら自体が文中にひとつの単語として現れることはない。言い換えると，at の前に AIM，for の前に HEAD という見えない動詞が存在している，という考え方である。これを(11b)

と(12b)に当てはめると，次のようになる。

(16) a. He kicked AIM at the ball.　(=11b)
　　b. The police searched HEAD for the body.　(＝12b)

AIM と HEAD はそれぞれ直前の kick，search と結びつき，その意味を変換している。喩えれば，AIM，HEAD を伴う at と for が，電圧や信号を変換するアダプターのような役割を果たしているのである。

AIM と HEAD の違いは，at と for の動詞との相性を調べることでより明らかになる。

(17) a. I gazed {at / *for} his face.
　　私は彼の顔をじっと見つめた
　　b. The man peeped {at / *for} the secret document.
　　その男は秘密文書をこっそり見た
　　c. The police searched {*at / for} the body.　(＝12b)
　　警察が死体を捜索した
　　d. The child scanned the crowd {*at / for} his mother.
　　その子供は母親を捜して人ごみに目を凝らした。

(17)の例はいずれも「見る」と類似した意味を持つ動詞を用いた表現である。これらの動詞に続く前置詞は，(17a)と(17b)は at，(17c)と(17d)は for だけしか容認されない。この違いは，それぞれの動詞と AIM，HEAD の意味の相性にあると考えられえる。どれも視線の動きを表す動詞であるが，gaze，peep と search，scan の大きな違いは，視線の行先が定まっているか否かである。gaze や peep の場合，その動作主の視線はそれぞれ his face, the secret document に定められている。一方で，search と scan は，for によって視線を向ける方向を示されてはいるものの，それは the body，his mother が在ると想定される方向であり，それらはまだ視界に入っていない。また，gaze と scan はともに「じっと見る」と訳すことができるが，gaze がある一点に視線を定めて見つめるという意味なのに対し，scan は for で示される「目標」の存在を確認しようと目を凝らす，という意味である。これらのことから，AIM は定まった一点への働きかけを表す動詞との相性が良く，一方，HEAD は漠然とした範囲への働きかけを表す動詞との相性が良いと考えられる。(17)で取り上げた「見る」系統の動詞の他には，at は打撃動詞（hit，bang，kick など），for は出発動詞（leave，start など）と相性が良く，共起しやすい。

また，もともと上述したような意味を持たない動詞であっても，at，for と合わさることで AIM，HEAD の意味が色濃く出る例もある。

(18) a. I would jump AIM at such a proposal.
b. He is listening HEAD for the music. (Cf. He is listening to the music.)

(18a)は「申し出に飛びつく」という意味であるが，jump それ自体には「跳ぶ」「跳躍する」という意味しかなく，ここに at が伴う AIM の意味が加わることで，jump at（飛びつく，飛びかかる）という対象へ狙いをつけた動きになる。laugh at，smile at，shout at といった表現にも同じことが言える。(18b)も，listen 自体には単純に「聞く」という意味しかないが，HEAD の意味が加わることでその行為の方向が示され，更に music が想定されるものとして示されていることから，「音楽が聞こえないかと耳を澄ました」という意味になる。ここでは音楽がまだ耳には入っておらず，聞こえてくることを予想して，そちらに注意を向けている様子が示されている。「（注意して）聞く，耳を傾ける」という意味の listen to と比べると，その違いは明らかである。

以上の分析を踏まえた上で，本論冒頭でみた(1)の違いについて考えてみよう。(1)に本分析をあてはめると，次のようになる。

(1)' a. He looked AIM at his watch.
b. He looked HEAD for his watch.

1 章で述べたように，同じ動詞に対して「目標」を表す at と for がどちらも用いられる例である。動詞 look は単純に「見る」という意味だと考えがちだが，look down，look up のように方向を表す前置詞が加えられること，また look after（世話をする），look into（調査する），look forward to（楽しみに待つ）などの「見る」とは違った意味が前置詞との組み合わせによって生じることを考慮すると，look は「見る」というよりも「視線が動く」という意味であり，それ自体に視線の行先を含意していないといえる[3]。この「視線が動く」という意味に AIM，HEAD がそれぞれ加わることで，（19）のような意味の変化が起きていると考えられる。

(19) a.「視線が動く」＋「**一点 ＋ 意図性(at)**」→「時計」＝「時計を見る」(＝1a)
b.「視線が動く」＋「**方向 ＋ 想定(for)**」→「時計」＝「時計を探す」(＝1b)

look に at を用いた場合，(19a)では「視線が動く」に意図を伴ってある一点へ絞り込む「めがける」という意味が加わり，「（特定のものを）見る・見つめる」という意味が生じている。一方，look に for が続く(19b)では，「視線が動く」の方向として，「時計があると思われ

[3] **動詞 look の意味**　*The Oxford English Dictionary Second Edition* では，動詞 look は次のように定義されている。
"To give a certain direction to one's sight; to apply one's eyes upon some object or towards some portion of space."

る方向」が for によって示される。また，あくまで「時計がある」と想定されるだけであり，動いた視線は時計には至っておらず，その方向に向いているだけであるため，「時計を探す」という意味が生じる。look for は熟語として認識されているが，実は(19b)のような意味変化が起きていると考えられる。

look と同様に，動詞 aim もまた「目標」の at と for をどちらも用いることができる。しかしこちらは look と違い，生じる意味に大きな違いが無いようである。本論を執筆するにあたり参照した英和辞典では，以下のような例文が書かれており，at と for での意味の区別については述べられていない。

(20) a. A skunk aims at [for] its enemy and shoots a liquid out in a spray.
（『ウィズダム英和辞典第２版』，2003，三省堂）
b. Zazen training aims at [for] emptiness.　（同上）
c. I'm not aiming for perfection.（『ロングマン英和辞典初版』，2006，桐原書店）
d. He is aiming for a second British Open title.
（『アドバンストフェイバリット英和辞典』，2002 年版，東京書籍）

本分析に基づけば，もともと「ねらう・目指す」という意味を表す動詞 aim に AIM という意味をもつ at を付加すると，非常に近い意味が加わるだけであるため aim 自体の意味はほとんど変化せず，その意図性の強さと定まった一点の明確さが際立つ。これに対して HEAD という意味をもつ for を付加した場合は, aim の意図性は弱まり, 曖昧な目標点が示される。そのため，例えば(20a)で at を用いた場合はスカンクが相手をきっちりと狙っていることが示唆され，for を用いた場合はスカンクが相手の方へやみくもにガスを噴射しているという解釈の違いが予想できる。

４. まとめ

本論では，動詞に後続しその動作の「目標」を示す前置詞 at および for がそれぞれ AIM と HEAD という意味をもっていることを示した。さらにそれらの意味を先行する動詞に付加することでその動詞の意味を変化させているという分析を示した。動詞と組み合わさることで，AIM を伴う at は，ある定まった一点をめがけて意図的な働きかけをしていることを表している。一方，HEAD を伴う for は，行為が向かう方向のみを示し，到着は含意しない。また，for の目的語は行為の対象として想定されている。

なお, at と for のどちらを用いるかで意味が変わる例は, 心情を表す形容詞にも見られる。

(21) a. He was <u>impatient at</u> the teacher's indifferent.（我慢ならなかった）
b. He is <u>impatient for</u> her call.（待ち焦がれている）
(22) a. The letter carrier became <u>anxious at</u> the sight of unleashed dog.（不安になった）

b. They are anxious for the safe return of the crew.（切望している）

(21)の impatient と(22)の anxious は，at と for で意味が異なる。先行研究や文法書等では「心情を表す形容詞 + at/for」はその感情の「原因・理由」を表すとされている。これらの前置詞が見えない動詞 AIM と HEAD 伴うとする本分析に基づくと，なぜ前置詞によって impatient at が「我慢ならない」となり，impatient for が「待ち遠しい」となるのかを解明することが可能であると思われる。このことは今後の研究課題とする。

例文引用文献

ジーニアス英和辞典机上版（1988）東京：大修館書店
ウィズダム英和辞典第２版（2003）東京：三省堂
ロングマン英和辞典初版（2006）東京：桐原書店
アドバンストフェイバリット英和辞典（2002）東京：東京書籍

参　考　文　献

高木紀子（2004）『前置詞 at，in，on の諸相（１）』「英語英文学研究 10」74‐88，東京家政大学
安藤貞雄（2012）『英語の前置詞』東京：開拓社
宗宮喜代子・石井康毅・他（2007）『道を歩けば前置詞がわかる』東京：くろしお出版
刀祢雅彦（2005）『前置詞がわかれば英語がわかる』東京：ジャパンタイムズ
花﨑美紀・花﨑一夫（2012）「*For* の意味論再考」『人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞46』85‐108，信州大学
宗宮喜代子（2007）「英語前置詞 for の意味」『東京外国語大学論集第 74 号』19‐38，東京外国語大学
防越敏彦（1998）「前置詞と他動性」『文学研究論集第 8 号』47‐62，明治大学

（2016年 1月20日　受付）
（2016年 2月10日　受理）